『無垢の歌』における「無垢」の二面性について

麻　生　雅　樹

ブレイクの作品である『無垢の歌』を取り上げ，詩とその版画の解釈を中心に，彼の意図した「無垢」が，二面性をもっていることを浮き彫りにしている。それは，一方で，無邪気な子供の直感による'vision'を通して現出する神＝キリストの愛と守りの世界を歌い上げ，もう一方で，大人への成長と，社会的抑圧に対する「無垢」の脆さを暗示させる。この二面性を明らかにすることで，『無垢と経験の歌』における対立概念という，常に人間の本質を追及したブレイクの思想に近づけることになる。

キーワード：「無垢」の二面性

ブレイク（William Blake, 1757–1827）32歳の時に編まれ，彫版された『無垢の歌』[1]（*Songs of Innocence,* 1789）は，子供，小羊，自然などをモチーフに，神もしくは神の愛の遍在を歌い上げた詩集である。ブレイクがこの詩集で主に子供を描いたのは，彼の意図した「無垢」の世界が，幼く，無邪気な子供の直感や‘vision’によって到達できるものだからである。その世界の中で，子供達は神，特に，キリストや親の愛によって守られ，喜びを分かちあう。しかし，人間がいつまでも子供でいられないのと同じように，その世界にいつまでもいることはできない。それは，大人への成長と現実社会の影響によって，常に失われるものなのである。

ブレイクは『詩的素描』（*Poetical Sketches,* 1783）の‘Blind–Man's Buff’という詩の中で，無邪気な子供の遊びがちょっとしたきっかけで台無しになる様を描いている。

But down he came.----Alas, how frail
Our best of hopes, how soon they fail![2]

楽しい目隠し遊びの最中，鬼となった男の子が，悪戯によってつまづき，けがをしてしまう。このように，子供の無邪気な遊びの裏には，いつも危険がつきまとっている。まるで，無垢な子供達が，目隠しをされて人生を歩んでいくような脆さを表現した詩ではないだろうか。

『無垢の歌』の‘Introduction’からわかるように，この詩集は子供達を喜ばせるためのものであり，‘Lamb’，すなわち，キリストについて歌ったものであるが，そこには，必然的な脆さが潜んでいる。この二面性について，『無垢の歌』から四つの詩を取り上げ，詩の解釈を中心にして，明らかにしてみようと思う。

1　‘The Ecchoing Green’と‘Nurse's Song’

この二つの詩は非常に似通った設定をもっている。楽しく遊ぶ子供達とそれを見守る大人達の愛情，‘green’のイメージで高められた自然のみずみずしい描写，疲れるまで遊ぶ子供達の無邪気さ，‘ecchoing’や‘ecchoed’の語によって表現される，子供達の喜びの空間の広がりなどである。しかし，注目したいのは，どちらの詩にも時間の経過が見られるという共通点である。

‘The Ecchoing Green’の第二連で，‘Old John’をはじめとする‘the old folk’は子供達の楽しそうな様子を見ながらこう言う。

‘Such such were the joys
When we all girls & boys,
In our youth-time were seen
On the Ecchoing Green.’[3]

子供の無邪気な喜びが普遍的であるとするこの詩行には，‘old’で表現され

る彼らの，人生における長い時の経過が過去形で示されている。もちろん，彼らの語る回想には否定的な悔恨の情は込められていない。しかし，大人への成長が子供の無邪気な遊びを過去のものとしてしまい，それは避けられないものであることが十分に読み取れる。これを伏線として，最終連ではもう一つ別の時間の経過がある。

Till the little ones weary
No more can be merry
The sun does descend,
And our sports have an end :
Round the laps of their mothers
Many sisters and brothers,
like birds in their nest,
Are ready for rest :
And sport no more seen,
On the darkening Green.[4)]

太陽が沈むとともに，子供達の楽しい遊びは終わりを迎え，大人達に連れられて家路につく。この時間の経過は，ただ単に一日の終わりを示しているだけではない。この詩の話者は，野原で遊ぶ子供達の中の一人であると考えられるが，最終連を注意深く見てみると，そこには無邪気な遊びの頃を過ぎて，大人への一歩を踏み出す若者の姿も描かれているのである。遊び疲れているのは‘we’ではなく‘the little ones’であり，子供達が戻る母親の膝は‘the laps of their mothers’である。自分を小さな子供達から離して考えようとするこの話者の態度には，大人への成長が見られるとともに，無邪気な遊びや母親の保護を失った哀愁が感じられる。それは，一行目の‘Till’や最後の二行が，時のはかなさと，もう二度と戻れない子供の遊びの世界を惜しむ，微妙な感情と一致する。そしてさらに，彼の心理にはブレイクの積極的な共通意識がはたらいていると言えるのではないだろうか。

この詩のモチーフは『無垢の歌』に先立って，『詩的素描』の中の‘Song’にすでに現れている。

I love the laughing vale,
I love the echoing hill,
　　・　・　・　・　・　・
I love the oaken seat,
Beneath the oaken tree,
Where all the old villagers meet,
And laugh our sports to see.[5)]

この詩は，ブレイクの若い頃のみずみずしい感情を表現したものであるが，最終連では，その感情が「キティー」という女の子に向けられ，‘the echoing hill’が象徴する無邪気な喜びの世界を抜け出し，異性への愛に目覚める多感な青年の心境を描いている。

この詩を基礎として‘The Ecchoing Green’が書かれたとすると，若者の視点が，ブレイクの若い頃と同じ意識をもったものであるということになる。つまり，子供の無邪気な遊びがいつかは見られなくなり，大人への成長の中で，過去のものになるという共通意識が，最終連での若者の視点を，ブレイクとの間で曖昧にさせているのだ。この裏には，‘Song’から‘The Ecchoing Green’までのブレイク自身の時間の経過があり，若者を通して，子供から大人への成長を見つめたブレイクの目があることに気がつくのである。

大人へと成長する若者の姿は，絵の中にも表現されている。一枚目の版画の下半分に描かれている繊細な巻づるは，二枚目の版画では，たくましい木に成長しており（ケインズは「命の木」‘Tree of Life’とよんでいる），枝から大きな葡萄の房をぶら下げている。一枚目の版画で，バットと輪っかをもった二人の男の子は青年となり，熟した葡萄をちぎっていて，そのうちの一人は，下にいる女の子にひと房手渡している様子が描かれている。彼らは「経験」の途上にあり，「無垢」の年令から性の目覚める年令への過渡期にいるのだ[6)]。この

詩は単に子供の無邪気さを歌ったものではなく，親達に守られる「無垢」から脱却し，すぐにでも恋愛に目覚める若者達の歌でもあり，「経験」への移行をほのめかす歌である。ブレイクがこの詩に描いた，楽しい喜びの情景にもかかわらず，時のはかなさという概念が詩の底に脈々と流れている。

'Nurse's Song' でも，子供の遊びとそれを見守る乳母との関係を通して，喜びの世界が歌われているのだが，ここにも時間の経過と「無垢」のはかなさを読み取ることができる。

第一連でこの詩の語り手である乳母は子供たちの声や笑い声を野原に聞くと，心の安らぎを感じるという。

When the voices of children are heard on the green
And laughing is heard on the hill,
My heart is at rest within my breast
And everything else is still[7)]

しかし，ここでは現実の特定された時間は示されていない。よって，子供たちの喜びに満ちた「無垢」の世界が普遍的に歌われていると考えられる。
それに続く第二連と第三連では乳母と子供達との会話がある。

'Then come home my children the sun is gone down
And the dews of night arise
Come come leave off play and let us away
Till the morning appears in the skies.'

'No no let us play, for it is yet day
And we cannot go to sleep
Besides in the sky, the little birds fly
And the hills are all coverd with sheep'[8)]

太陽が傾き，一日が終りに近づくとともに，乳母は遊びをやめて家に帰ろうと言うのであるが，彼らはまだ昼だし，寝ることなんてできないという。この一日の時間の経過に対する乳母と子供達の立場の違いは，「無垢」の世界で無邪気に遊び，その瞬間の喜びを楽しむ子供の立場と，成長によって，その世界を失った，大人としての乳母の立場の違いに相当するだろう。子供達にとって，今はまさに‘day’であり，鳥や羊のいる野原はどう見ても，やさしき神の愛に守られた「無垢」の世界なのであるが，乳母は，単なる一日の時間の経過が呼び起こす，もっと大きな時間の流れを彼女自身の経験から感じ取っている。その彼女の過去，未来という時間の感覚が今という現実を見えなくさせ，またその感覚によって現在に不安を感じているのである[9]。現在の時間の感覚を失って，不安が生じた乳母には鳥や羊，そして子供達のいる野原さえも見失ったかのように日が沈み行くと感じ，‘the dews of night’を恐れるのである。‘the dews of night’は‘The Little Boy Lost’の‘wet with dew’や『経験の歌』の‘Introduction’における，‘And weeping in the evening dew’のように不安と悲しみを象徴している。

結局子供達の話を聞くうちに，現実を取り戻した乳母は，まだ遊んでもよいと許可を与える。それは「無垢」の世界にいる無邪気な子供達への愛とやさしさであるとともに，子供達に対する時のはかなさを思い，一日の終わりの中で，少しづつ失われていく遊びの時間を大切にしようとする態度でもあるだろう。

さて，最終連の最後の二行は慎重な解釈が必要である。

The little ones leaped & shouted & laugh'd
And all the hills ecchoed[10]

他の詩行は現在形で書かれているのに対し，この二行は過去形で書かれている。最初にみたように，この詩の冒頭には特定の時間の設定はない。このことから考えると，五行から十四行目までの会話が不特定な過去の出来事を，乳母が思い起こしていると考えられるだろう。つまり，ここには現在へと戻る時間の経過があり，子供たちの「無垢」も，彼らが大人になることによって，失わ

れたことが暗示されているのである。

ケインズは，この詩の版画の解釈において，右手中央に描かれている‘weeping willow’が，人生のすべてが楽しく，そしてゲームではないことを表わしたものであるとしている[11]。

このように，‘The Echoing Green’と‘Nurse's Song’を解釈すると，「無垢」の世界を高らかに歌い上げるとともに，成長によって，その世界を失うという必然性とはかなさが盛り込まれているのに気付くのである。

2 ‘The Little Black Boy’と‘The Chimney Sweeper’

この二つの詩では，社会的に強いたげられている最下層の子供達に焦点が当てられている。そこにはブレイクの現実社会を見つめる厳しい目と，弱い立場にある子供に対する愛情が表現されている。その二つの感情が，それぞれの詩の中で，ひとつは子供達の‘vision’を通して，強烈なキリストの愛に守られた「無垢」の世界となり，一方では，「経験」の世界へと押しやる現実社会に対する不可避性の暗示となって現れていると思われる。

まず，‘The Little Black Boy’を見てみると，第一連では‘I’で語る黒人の男の子は黒人に生まれたことを気にしているようである。

My morher bore me in the southern wild,
And I am black, but O! my soul is white.
White as an angel is the English child :
But I am black as if bereav'd of light.[12]

この黒人の少年は，現実社会の黒人に対する不当な扱いを，身をもって感じている。彼は自分の魂が白いと主張するのだが，まるで生まれながらに神から見離され，光を奪われたような黒人として生まれたことを気にしているのである。その事実は彼に重くのしかかっている。それに対して，イギリスの子供は天使のように白い。このように，現実社会への不満が神への不信となり，彼は

まさに「無垢」を失いかけている。そこには神の愛もなく，現実社会の厳しさにただ直面しているだけである。

そこで彼の母はひとつの教えを授ける。

'Look on the rising sun! there God does live
And gives his light and gives his heat away ;
And flowers and trees and beasts and men recieve
Comfort in morning joy in the noon day.

'And we are put on earth a little space,
That we may learn to bear the beams of love ;
And these black bodies and this sun–burnt face
Is but a cloud, and like a shady grove.

'For when our souls have learn'd the heat to bear
The cloud will vanish we shall hear his voice,
Saying : "come out from the grove my love & care
And round my golden tent like lambs rejoice."'[13)]

神の愛は太陽の光と熱によって，地上のすべてのものに注がれ，安らぎと喜びを与えている。人間はその肉体を通して'the beams'や'the heat'となった神の愛に耐えることを学ぶのであるが，魂がそれを学べば，雲に過ぎない肉体はもはや消えてしまう。この地上において，肉体は魂が神の愛に耐えることを学ぶための器官であり，黒人であろうが白人であろうが，それが消えれば，第一連で黒人の男の子が主張するように，魂は皆同じなのであり，神の'golden tent'のまわりで一緒に楽しむことができるのである。

太陽の光としての神の遍在と，肉体と魂を分けることによって，魂の平等性を説く母の教えは，黒人として当然受けることになる不当な扱いや，それに伴う嘆きと悲しみを天国での救いで癒すものである。人間がこの世にいるのはほ

んの一瞬のことであり，人生において，避けられない多くの苦難があろうとも，それは神のもとへと行く準備なのである。現世の否定ともとれるが，母の今迄の経験から得た賢い教えであり，それは息子への愛なのであろう。さらには，強烈な神の愛の光と熱に耐えるには黒人の方がより勝っていることを暗示さえしている。

しかし，この母の教えは，第一連で黒人の男の子が示した色の違いについての嘆きに根本的な解決を与えていない。彼女の説明では，生まれながらに黒人は黒人，白人は白人であり，人生において黒人は劣勢に立つが，あの世では皆平等であると言っているに過ぎない。それならば，この教えは，つらい人生をより耐えうるものにするための知恵だということができよう。しかし，生きる希望ではあるが，息子の嘆きは嘆きのまま残されて，現実社会では，その教えが，息子に向けられる抑圧をさえぎることはできないのである。しかしながらその母の教えは息子にひとつの‘vision’を与えることになる。

And thus I say to little English boy :
When I from black and he from white cloud free,
And round the tent of God like lambs we joy :

Ill shade him from the heat till he can bear
To lean in joy upon our father’s knee
And then Ill stand and stroke his silver hair
And be like him and he will then love me.[14)]

この‘vision’は母の教えをきっかけとして，短絡的とも言える幼い子供の直感によって導き出されたものだが，彼の‘vision’は重要な部分で母の教えと異なっている。彼は，イギリスの男の子と共に‘the tent of God’のまわりで，羊のように楽しく喜び合うことができることを確信するが，彼独自の‘vision’によって初めて，「無垢」を取り戻すのである。

彼の‘vision’では，彼とイギリスの子供は雲から抜け出た後も，肉体の機

能は維持している。なぜなら彼は，神の膝にもたれるために熱からイギリスの子供を守り，耐えれるようにすると言っているからである。これは，神の愛の熱により耐えやすいように作られた黒人の肉体の優位性を未だ備えているからにほかならない。恐らく彼の母が説く肉体と魂の二元的な教えは，彼の理解を越えているのだろう。ましてや，天国がどんなところなのかを理解することは不可能である。結局，この黒人の男の子は‘vision’によって時間と空間を越えた天国，つまり‘the tent of God’を地上に築き上げたと言えるのではないだろうか。母が救いをあの世に見いだしているのと反対に，息子はあくまでもこの現世において神を見いだそうとしているのである。彼の「無垢」の世界では，雲から抜け出ることが肉体そのものからの遊離を意味するのではなく，社会から蔑まれているだけの黒い肌を脱ぎ捨てるということを意味していると思われる。イギリスの子供にしても，社会から認められているだけの白い肌を脱ぎ捨てることを意味する。そうすれば，黒人の男の子の肉体は，神の愛の熱に耐えるという優位性を持った肉体だけを持つことになり，社会的影響を受けないで，お互い喜んだり，愛し合うことができるのである。

彼の到達した「無垢」の状態は現世における神の認識であり，肉体とは切っても切れない。それは幼い子供の直感や‘vision’によって得られるものなのである。そのようにして築かれた「無垢」の世界はとても貴重なものであるが，それゆえに，とても脆いものだと言えることができるだろう。これはあくまでも黒人の男の子だけの世界であり，イギリスの子供のものではない。現実を見つめると共に，彼の「無垢」の世界は崩壊を始める。現実のイギリスの男の子は自分を好きになってくれるかわからないのである。その不安は彼の「無垢」の世界を侵食する。最終連の最後の二行は，その不安を見事に表わしているといえるだろう。子供の幼い直感は‘vision’を通して，この現世に「無垢」の世界を現出させ，神の認識へと到達させる。しかしその世界さえも，現実の壁に阻まれてしまう性質のものである。

‘The Chimney Sweeper’でも‘The Little Black Boy’と同じく，社会の最下層に置かれている煙突掃除の少年が苦境の中で「無垢」を見いだす。

この詩の語り手である‘I’は，母と父をなくし，まだ‘weep weep’とし

か言えないのに，父に売られてしまった不幸な境遇である。そして煙突掃除をしている。しかし，彼はくよくよせず，それどころか，同じ煙突掃除仲間のトム・デイカーが羊のような巻毛を切られて泣いているとき，こう説くのである。

'Hush Tom never mind it, for when your head's bare,
You know that the soot cannot spoil your white hair.'[15)]

ここでの'I'は'The Little Black Boy'の母と同じ役割を持っている。黒人の男の子が黒い肌を嘆くように，白い巻毛を切られてトムが嘆いているとき，'I'が説くのは，トムの魂の白さであり，それはいくら煤にまみれようとも，汚されることのないものだということである。トム・デイカーは黒人の男の子と同じように納得する。そしてその夜，夢を通して'vision'を見るのである。

As Tom was a sleeping he had such a sight,
That thousands of sweepers Dick, Joe Ned & Jack
Were all of them lock'd up in coffins of black,

And by came an Angel who had a bright key,
And he open'd the coffins & set them all free.
Then down a green plain leaping laughing they run
And wash in a river and shine in the Sun.

Then naked & white, all their bags left behind,
They rise upon clouds, and sport in the wind.
And the Angel told Tom if he'd be a good boy,
He'd have God for his father & never want joy.[16)]

何千という煙突掃除人たちが黒い棺桶に囚われている。これは彼らの厳しい状況を表現したものだと考えられ，‘The Little Black Boy’で言えば，雲のようなものである。そこに天使が蓋を開けにやってきて，彼らは自由になり，野原で跳びはねたり，笑ったりして楽しむ。まさに‘The Little Black Boy’の‘the tent of God’のまわりで遊ぶ子供達と同じである。天使はトムに，もしいい子にしていたら神という父をもつことになるし，喜びも決してなくならないという。

この‘vision’を通してトムは，神の認識に至るのである。彼の「無垢」の世界は，神の愛による自由を彼に確信させた。その思いはこれからの生活における希望となるだろう。

And so Tom awoke and we rose in the dark
And got with our bags & our brushes to work.
Tho' the morning was cold, Tom was happy & warm.
So if all do their duty, they need not fear harm.[17)]

しかし，その救いは最後の一行に見られるように教訓的である。トムは‘vision’によって神の存在を啓示されたが，その「無垢」の状態でとどまることは不可能であり，結局，現実社会へ引き戻されることになる。確かにトムには希望が生まれたかも知れない。しかし，ケインズが言うように‘duty’がこの現世を生きることを意味するならば，その教訓的な最終行が，現実社会から目を背けることの難しさを暗示しているように思われる。この行の語り手は‘I’なのであろうか。‘their’や‘they’の語は語り手を曖昧にさせている。ここには「無垢」の大切さと神の愛の尊さが示されると共に，現実社会の厳しさに直面して，このように教訓的にならざるを得なかったブレイクのためらいを感じさせるのである。

3 結　　語

これまで見てきたように，子供達の感覚と想像力が作り出す「無垢」の世界を通して，神と神の愛を見いだすことは，普遍性をもち，とても貴重なものであるが，大人への成長と社会的抑圧によって失われていく性質をもっている。これは，神もしくは神の愛に守られた喜びの世界だけが存在することはできないということである。無垢な子供達も，永久に「無垢」の世界にとどまっていることはできない。それは，人間の本質に大きく関わっているのである。

『無垢の歌』は，キリストの愛と守りという，純粋無垢な世界を歌ったものだが，ブレイクの他の作品と比べてみると，異質だといえるだろう。確かに，『詩的素描』の一本に書かれた詩（'Songs by Shepherds', MS Poems in *Poetical Sketches,* 1789[18]）の 'Song 3 d by an old Shepherd' にもみられるように，「無垢」は，つらい人生の襲い来る嵐に打ち勝つものであるという考えが，一時，ブレイクにあったようだ。しかし，それは，ブレイクの求めた人間の本質的な姿ではなかった。そのはかなさをも描き，その「無垢」の二面性の気づきから「経験」との対立を通して，人間の本質へと迫る魂の探求へと深められるのである。

この詩集はその後，『経験の歌』（*Songs of Experience,* 1974）と合本され，人間の魂の二つの相反する状態を示すものとして完成することになるが，これは，対立というブレイクの重要な思想を表わすための必然的な結果であった。この対立概念を考える上で，『天国と地獄の結婚』（*The Marriage of Heaven and Hell,* 1792）は欠かすことのできない作品である。その中で，ブレイクはこう書いている。

Without contraries is no progression. Attraction and Repulsion,
Reason and Energy, Love and Hate, are necessary to Human existence.
From these contraries spring what the religious call Good and Evil.
Good is the passive that obeys Reason. Evil is the active springing from

Energy.

Good is Heaven. Evil is Hell.[19]

人間存在における対立の必要性は善と悪の問題に大きく関係しており，そこにブレイクの求めた人間の本質があると言える。そして，この作品に見られる善と悪の問題は，ラヴァーター（Johann Caspar Lavater, 1741–1801）の『人間についての格言』（*Aphorisms on Man,* 1788 in English）への書き込みでわかるように[20]，早い段階からブレイクの心を捕えていた。つまり，『無垢の歌』に取りかかっている頃からすでに，人間の本質が単純なものではなく，二重の存在であることに気づいていたのである。

後に‘Auguries of Innocence’の中で，彼はこう書いている。

Man was made for Joy & Woe
and when this we rightly Know
Thro the World we safely go
Joy and Woe are woven fine
A Clothing for the soul divine[21]

これこそ，ブレイクがみた人間の本質であり，これからを生きていく子供達に必要なのは，決して「無垢」の世界だけではなく，その脆さを知り，人間の本質が，常に「無垢」と「経験」の対立するものであることを知ることなのである。

注

1）ブレイクの著作の邦題はすべて，梅津濟美訳『ブレイク全著作』（名古屋大学出版会，1989）による。

2）G. E. Bently, Jr. (ed.), *William Blake's Writings* (2 vols., The Clarendon Press, Oxford, 1978), p. 770.

3）Ibid., p. 27.

4）Ibid., p. 27.

5）Ibid., p. 758.
6）*Songs of Innocence and of Experience* : with an introduction and commentary by Sir Geoffrey Keynes (Rupart Hart–Davis, London in association with The Trianon Press, Paris, 1967), plates 6–7.
7）*Writings,* op. cit., p. 47.
8）Ibid., p. 47.
9）Zachary Leader, *Reading Blake's Songs* (Routledge & Kegan Paul, London, 1981), p. 103.
10）Writings, op. cit., p. 47.
11）Keynes, op. cit., plate 24.
12）Writings, op. cit., p. 29.
13）Ibid., p. 30.
14）Ibid., p. 30.
15）Ibid., p. 33.
16）Ibid., p. 33.
17）Ibid., p. 33.
18）この詩の作年代は梅津氏の説による。
19）Writings, op. cit., p. 77.
20）Ibid., p. 1373. 格言 489 に対する書き込み
21）Ibid., p. 1313.

（あそう　まさき　文学研究科英米文学専攻　博士前期課程）
（1995 年 10 月 25 日受理）